

一般社団法人日本超音波医学会
第16回特別学会賞受賞者



上妻 志郎 (1953-2013)

上妻 志郎 先生の受賞を讃えて

この度、上妻志郎先生が日本超音波医学会の第16回特別学会賞を受賞されました。かつての研究仲間がこの様な名誉ある賞を受けられたことは私達にとっても大変光栄で喜ばしいことであります。

上妻先生は1978年に東京大学医学部医学科を卒業され、同産婦人科学教室に入局されました。その後、私達と同じ研究室の所属となり、胎児の生理学や産婦人科の超音波診断学の研究に携わってこられました。東大の教室では1981年に助手、1993～1994年に英国ロンドン大学ユニバーシティカレッジ産婦人科研究員、1996年文部教官講師、1997年助教授、2007年准教授、となられ、2008年に東京大学大学院医学系研究科生殖発達加齢医学教授に就任されました。その間、日本超音波医学会では、専門医制度委員会、顕彰委員会、編集委員会、教育委員会をはじめその他数々の委員を歴任され、2010年からは編集委員会委員長として“和文誌「超音波医学」・英文誌「Journal of Medical Ultrasonics」」の編集長を務められました。また、2000年から評議員に、2010年から理事に就任され、学会の運営にも多大な貢献をしてこられました。

上妻先生の業績に関しては後述することとして、彼は温厚で優しい人柄である一方、学問における自らの信念は崩さないと言う強い意志を保持し続けてこられました。彼の打ち立てた“胎児行動学”という金字塔は、その信念がなければ出来なかったのではないかと考えています。そんな上妻先生が、2013年11月、肺癌のためご逝去されました。私達は、彼が特別学会賞を受賞されたことを慶賀すると共に、この場においても彼の死を悼む言葉を述べずにいられません。以下に、超音波医学41巻2号(2014)に掲載された弔文を一部修正して記させて頂くことにします。

上妻志郎先生の病に気付いたのは2012年の初秋の頃だったと思います。日本産科婦人科学会の理事会で、「風邪をこじらせて、なかなか治らないんです」と言いながら、「ごほん、ごほん」と咳をしておられました。まさか、それが、彼の崇高にして尊い命を奪う疾病の兆候だとは、全く考えてもみませんでした。今更ながら、もう少し早く検査を受けていれば、と無念でなりません。

上妻先生は、私にとって、東大産婦人科の旧 ME 研究室で楽しい時間を共に過ごした最も親しく、また、最も信頼のおける研究仲間の一人です。最近では東大に伺っても教授室に直行することがほとんどで、研究室の今の様子は知りませんが、当時は真中にデスクが寄せられていて、両の壁側にロッカーが並んでいました。ドアを開けると左側に昔使われていたらしい古びた ME 機器が置かれ、その前を進んだ一番奥に私の机があり、向かいに上妻先生が坐っていました。二人共、よく夜中までそこに居たせいでしょうか、若い頃の先生の姿はこの部屋の光景と重なります。

入局される前から、上妻という名前だけは私の耳に入っていました。東大医学部にサッカーがとても上手な兄弟がいて、そのうちの弟さんが産婦人科に来るとの噂があり、それが上妻先生だったのです。私もスポーツ大好き人間ですから、その先生に会うのを楽しみにしていました。ところが、お会いしてみると、最近とは違って当時は太めの体躯で、香川やメッシらの様な俊敏な動きを窺わせる雰囲気は全く感じ取れませんでした。それでも医学部では並はずれて優秀な選手と言われていたのは、一つ一つのプレーが堅実で、安心してボールを預けることが出来たからで、試合を有利に運ぶ展開の基点になる選手だったに違いないと、後から思い至ったものでした。入局後、嬉しいことに、上妻先生が超音波に興味を持っていることを知った私は、恩師である坂元教授に彼を私の研究室に配属してくれる様にお願ひしました。その要望を適えて頂いたお陰で、先輩が相次いで大学を離れたために私一人になっていた研究室に、力強い仲間が加わることになったのです。

研究室では、デスクワークの傍ら、いろんな話をしました。政局批判から始まって話題の本の論評、話は食べ物の嗜好等々にも及びましたが、中でも楽しかったのはスポーツ談義でした。サッカーだけではなく、野球、アイスホッケー、アメフト、スキー、などなどスポーツの話題なら何でも論議のテーマになりました。この弔文を書きながらも、野球のバッティング理論を熱く語る上妻先生の姿が臉に浮かんできます。

研究の方は、まず、何を置いても超音波でした。超音波医学は黎明期を過ぎ、一気に臨床応用への発展を加速させていた頃で、臨床データを整理しさえすれば論文になる時代でした。その傍ら、どちらが正診だったか、と診断精度を競ったりしたものです。

しかし、その頃既に、経験では長けていた筈の私が、この男には直ぐに抜かれる、と感じていたのも事実です。画像を診る彼のねちっこさにはとても敵わないと思ったのです。このねちっこさが博士論文となった fetal behavior の“緻密（上妻先生が好きな表現で、原稿によく出てきました）”な分析に繋がったとの見方もまんざら間違っていないと思います。

ここで上妻先生の超音波医学に関する主な研究業績をご紹介します。後にメンバーが増加し大きくなった前述の研究室の仲間達との共同研究も含めて記させていただきますと、妊娠初期諸疾患の超音波診断、胎児行動発達の解析、胎児体重推定式の作製、胎児奇形の超音波診断、胎児の血流計測と心機能評価、胎児の超音波三次元表示、胎盤・臍帯異常の超音波診断、子宮内膜の超音波診断、卵巣腫瘍のエコーパターン分類、月経周期と子宮内膜の関連、子宮内膜異常の超音波診断、卵胞発育と排卵の超音波診断、排卵誘発と卵胞発育の関係等々が挙げられ、産婦人科領域の重要な超音波診断のほぼ全てを網羅すると言える程に幅広い領域で活発な研究活動を展開してられました。

いつのことだったか、何の研究についてだったかとも思い出せないのですが、忘れられない上妻先生の言葉があります。「この研究は早く論文にまとめないと、他大学の人に先を越されるよ」と私が言った時、先生はこう返事されました。「誰かが良い論文を出してくれるのならそれでいいです。私はまた別の研究をします。」上妻先生には私が持たない徳がありました。学をひけらかさない、功に逸らない、信に背かない。

東大教授に就任されても、何ら変わることはありません。日超医のみでなく他学会の理事会でも、核心を衝く重要な見解を控え目に発言される一方で、賛成出来ない意見には納得するまで反対の主張を崩さない姿はかつての研究室のミーティングの時と全く変わっておらず、事程左様に、上妻先生はいかなる場面においても自身の姿勢を頑固に貫き通して来ました。これは医学者としての信念の堅持と換言することが出来、彼の敬愛すべき人性の一つだと私は思っています。

多分野の研究者が集うことから調和の取れた運営が難しい本会において、上妻先生は文字通り余人をもって代え難い貴重な良識派理事のお一人でありました。学会と社会のためにも、またご自身のためにも、まだまだこれからというその年で天界に登られ

た上妻先生を、出来ることなら現世に引き戻したいと、彼を知る誰もが思っていることでしょう。この惨い現実には、共に研究生活を送った私達仲間は涕涙を堪えることが出来ません。

受賞の喜びと共に哀悼を込めてご冥福を祈るばかりです。

(社会福祉法人 恩賜財団 母子愛育会 総合母子保健センター 愛育病院 病院長
/ 日本超音波医学会 名誉会員 岡井 崇)

2014 JSUM Prize Winner Shiro KOZUMA, M.D.FJSUM, SJSUM (1953 - 2013)

It is our great pleasure to write here to congratulate Dr. Shiro Kozuma his being awarded sixteenth Prize of the Japan Society of Ultrasonics in Medicine.

He graduated from Tokyo University, Faculty of Medicine in 1978 and completed his residency there. He began to work as a practitioner and a researcher in the Department of Obstetrics and Gynecology of Tokyo University Hospital. His main thesis in research work was the related subjects to ultrasonic diagnoses in Obstetrics & Gynecology such as diagnostic criteria of diseases in early pregnancy stage, analysis of fetal behavioral development, establishment of formula for estimated fetal weight, diagnostic methods for fetal structural anomaly, measurement of fetal blood flow velocity, evaluation of fetal cardiac function, three dimensional visualization of fetuses, diagnosis of placental and/or umbilical cord abnormality, diagnostic criteria of endometrial diseases, classification of ultrasonic patterns of ovarian tumors, relation between

endometrial character and menstrual cycle, evaluation of ovarian follicle development, analysis of ultrasonic pattern of uterine sarcoma and etc.

He was awarded Matsuo Prize from JSUM for these active research works and the publication of many scientific articles on ultrasonics in medicine in 2007.

He served 12 years as a member of journal committee, and in 2010, assumed an editor in chief of "Japanese Journal of medical ultrasonics" and was elected as an executive board member of JSUM.

To our great regret, however, Dr. Shiro Kozuma has passed away due to a malignant disease in 2013. We would like to express our sincere congratulation to him for being awarded the 2014 JSUM prize even in deep sadness.

(Takashi OKAI, M.D., Imperial Gift Foundation Maternal and Child Health Center Aiiku Hospital Director, Eminent member of JSUM)

参考文献

- 1) Kikuchi A, Unno N, Kozuma S, et al. Detrended fluctuation analysis of heart rate variability in normal and growth-restricted fetuses. *Gynecol Obstet Invest* 2008;65(2):116-22.
- 2) Kikuchi A, Unno N, Shiba M, et al. Multifractal description of the maternal surface of the placenta. *Gynecol Obstet Invest* 2008;66(2):127-33.
- 3) Matsumoto J, Kawana K, Nagamatsu T, et al. Expression of surface CD1d in the extravillous trophoblast differentiation. *Biochem Biophys Res Commun* 2008;371(2):236-41.
- 4) Kozuma S. Normal fetal anatomy and development. In: Hata T, Kurjak A, Kozuma S (eds). *Current Topics on Fetal 3D/4D Ultrasound*. Bentham eBooks 2009. p. 1-11.
- 5) Wada-Hiraike O, Yamamoto N, Osuga Y, et al. Aberrant implantation and growth of uterine leiomyoma in the abdominal wall after laparoscopically assisted myomectomy. *Fertil Steril* 2009;92(5):1747, e13-15.
- 6) Kozuma S. Approaches to anemia in pregnancy. *JMAJ* 2009;52(4):214-8.

- 7) Kozuma S. Three-dimensional ultrasound is increasing our knowledge of the fetus little by little. *J Med Ultrasonics* 2009;36(2):51-2.
- 8) Okai T, Ikeda T, Kawarabayashi T, et al. Intrapartum management guideline based on fetal heart rate pattern classification. *J Obstet Gynecol Res* 2010;36(5):925-8.
- 9) Okamoto M, Murayama R, Haruna M, et al. Evaluation of pelvic floor function by transabdominal ultrasound in postpartum women. *J Med Ultrasonics* 2010;37(4):187-93.
- 10) Imada S, Yamamoto M, Tanaka K, et al. Hypothermia-induced increase of oligodendrocyte precursor cells: Possible involvement of plasmalemmal voltage-dependent anion channel 1. *J Neurosci Res* 2010;88(16):3457-66.
- 11) Masuda A, Fujii T, Iwasawa Y, et al. Serum autotoxin measurements in pregnant women : application for the differentiation of normal pregnancy and pregnancy-induced hypertension. *Clin Chim Acta* 2011;412(21-22):1944-50.
- 12) Isono W, Nagamatsu T, Umemura Y, et al. Prediction model for the incidence of emergent cesarean section during induction of labor specialized in nulliparous low-risk women. *J Obstet Gynaecol Res* 2011;37(12):1784-91.
- 13) Nakayana T, Kikuchi A, Okuno T, et al. Enlarging amniotic fluid 'sludge' in preterm labor associated with severe course of sepsis and recurrent tension pneumothorax in the infant. *J Med Ultrasonics* 2012;39(3):187-92.
- 14) Iriyama T, kamei Y, Kozuma S, et al. Management of patient with arrhythmogenic right ventricular cardiomyopathy during pregnancy. *J Obstet Gynaecol Res.* 2013;39(1):390-4.